

名品コレクション展Ⅱ

2024年9月27日（土）～12月7日（日）

名古屋市美術館のコレクション

エコール・ド・パリ

第一次世界大戦後、芸術の都パリには世界各地から夢を抱いた若い美術家たちが集まってきました。

モディリアーニ、シャガール、スーチン、パスキン、キスリング、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、ザツキン、ブランクーシなど、故郷を離れた異邦人たちは、貧しいながらも自由に活気に溢れた生活のなかで、パリ生まれのユトリロ、ローランサンといった画家仲間との交友や新しい芸術が次々に登場するパリ画壇に刺激されながら、それぞれ独自の芸術を開花させました。

芸術の都パリに育まれた画家たちは、総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれています。身近な人々の姿や街角の風景を描いた彼らの作品には、キュビズムやシュルレアリスムといった同時代の前衛的な芸術とは違って、庶民生活への親密感が溢れるとともに、異邦人としての郷愁が漂っています。

「エコール・ド・パリ」の系譜につながる日本人画家としては、パリに生きパリを描き続けた荻須高德をはじめとして、田中保、海老原喜之助、岡鹿之助などが活躍しました。

メキシコ・ルネサンス

20世紀初頭のメキシコ革命を背景として、マヤ、アステカといったインディオ文明の復興と新しいメキシコの建国精神を民衆に伝えるために創始されたメキシコ壁画運動は、アメリカ大陸において初めて登場した美術運動として「メキシコ・ルネサンス」とも呼ばれ、世界的に高く評価されています。

壁画運動の三大巨匠であるオロスコ、リベラ、シケイロスはイタリア・ルネサンスの壁画をはじめとして、ヨーロッパの近代美術（表現主義、キュビズム、未来派など）に学びながら、メキシコ民族独自の造型を踏まえた現代の壁画を三者三様に創造しました。

彼らは1930年代のアメリカ合衆国においても数多くの壁画制作を行って、「アメリカン・シーン」の画家たち（シャーン、スローンなど）をはじめとして、アメリカの現代美術の誕生に大きな影響を与えています。

三大巨匠の他にも、壁画運動以降の世代を代表する画家タマヨ、民衆版画家ボサダ、魅力的な女性画家カーロやイスキエルド、写真家ブラボーやモドッティなど、数多くの個性豊かな美術家たちが活躍しました。

北川民次もまた同時代のメキシコに滞在して、野外美術学校の運動に携わりながら、壁画運動から学んだ精神と画風によって、帰国後は日本画壇において「反骨の画家」として活動しました。

現代の美術

第二次世界大戦以降、急速に展開した現代美術は、既成の美術の枠組みを越えて、まったく新しい表現や造形、空間や概念を開拓してきました。パリからニューヨークへ中心地が移行して、国際化した美術界において、数多くの日本人作家が海外に進出して、創作的な活動を活発に展開しています。

名古屋文化圏もまた、荒川修作、桑山忠明、河原温といった国際的に評価の高い作家たちを輩出しました。彼らは、ある特定の概念を言葉や記号などによって提示する「コンセプチュアル・アート」や表現を極限まで切り詰めた「ミニマル・アート」などの現代美術の分野の代表作家として知られています。

1980年代以降になると、現代美術は新しい局面を迎え、その表現と内容がより豊かに多様化して、それぞれの作家の思想（芸術観）が作品のなかに明確に現れてきました。

新しい世紀の激動に翻弄されながら現在も、作家たちは私たちが生きている時代と世界を、過去から未来へと連続する時間の流れのなかで、あるいは生命と宇宙の連関のなかで、それぞれ独自の観点から鋭く探求し、深く思索することによって、新しい美術を創造しようとしているのです。

郷土の美術

名古屋の近代美術は、明治後期頃から本格的に始まりました。東京に学んだ野崎華年と鈴木不知が洋画塾を開設して、後進の指導を始めるとともに、東京美術学校に学んだ加藤静児や太田三郎が文展に入選するようになって、1910年には、名古屋の洋画家・日本画家を結集した東海美術協会が創設されました。

大正期には、名古屋独自の洋画グループとして、岸田劉生の草土社に触発されて1917年に結成された愛美社（大澤鉦一郎、宮脇晴など）や関東大震災を契機に1923年に結成されたサンサシオン（松下春雄、鬼頭鍋三郎など）などが登場しました。

昭和期には、二科会の初期の会員となった熊谷守一や横井礼以、春陽会に参加した山本鼎、帝展の代表作家となった佐分真、独立美術協会に参加した伊藤廉や三岸好太郎、三岸節子などが東京画壇で活躍しました。1930年代の前衛美術の分野では、シュルレアリスム絵画・写真（北脇昇、下郷羊雄、山本惇右など）や抽象絵画（村井正誠、矢橋六郎、山田光春など）が活発な活動を展開しました。

日本画では文展の川合玉堂、院展の前田青邨をはじめ、地元では平岩三陽、渡辺幾春などが活躍しました。

エコール・ド・パリ

藤田嗣治の周辺

開催中の特別展「藤田嗣治 絵画と写真」に関連して、名古屋市美術館のエコール・ド・パリのコレクションから、藤田と交遊のあった作家の作品を中心に展示します。

1913年にフランスに渡った藤田は、パリのモンパルナスに居を構えました。当時のモンパルナスは画家が多く暮らしており、藤田は隣人となったアメデオ・モディリアーニ、ハイム・スーチンと交遊を深めました。1918年に藤田はモディリアーニ、スーチンと共に第一次世界大戦で混乱するパリを離れ、南フランスのカーニュに滞在し、3人で同地在住のルノワールを訪ねました。《おさげ髪の少女》《農家の娘》はそれぞれ南フランス滞在時の制作と考えられている作品です。藤田とモディリアーニの交遊を示す作品として、藤田が生涯手元に置いた、モディリアーニによる藤田のデッサンが残っています。

また、藤田はモディリアーニやスーチンを通じてジュール・バスキン、キスリング、オシップ・ザツキンとも交流するようになりました。特にザツキンは二科会外国会員として日本に作品を出品し続けた親日家として知られています。

さらに、藤田と交遊のあった渡欧経験のある日本人画家として、海老原喜之助、岡鹿之助、東郷青児の作品を取り上げます。1923年にフランスに渡った海老原喜之助は、すぐに藤田を頼り、絵画は勿論、異国での生活の術も学びました。藤田が1968年に亡くなった際は、その最期を看取り、葬儀を含めた事後処理にも尽力しました。岡鹿之助も1924年にフランスに渡り藤田の指導を受け、1939年に帰国するまで同地で活躍、帰国後は春陽会を中心に活動しました。

1933年に帰国した藤田は、翌年に二科会に所属、1939年に再び日本を離れるまで国内各地に滞在し制作活動をしました。この時期に藤田と深い交遊を結んだのが東郷青児です。1934年に藤田は銀座のブラジルコーヒー店のために壁画を描きましたが、この時に助手を務めたのが東郷でした。1936年には、二人は丸物百貨店で競作壁画の制作を行いました。1938年には二科会内部に設けられた前衛絵画研究団体・九室会に、藤田と東郷が顧問として迎え入れられました。

現代の美術

戦後日本画の展開

常設企画展「近代名古屋の日本画界」と関連して、戦後の日本画の動向とその展開について紹介します。戦後間もなくの昭和24年（1949）に結成されたパンリアル美術協会は、従来の日本画の型を破る前衛的な作品を発表しました。名古屋市美術館では愛知県出身でパンリアル美術協会の結成メンバーである星野真吾との関連から、三上誠、下村良之介、大野倣高らの作品も所蔵しています。パンリアル美術協会の画家たちは、日本画材の他に、紙粘土、麻袋、段ボール、荒縄、木片といった多種多様な材料を取り入れて作品制作を行いました。その中でも星野は画面に糊を付けた人体を押し当て、そこに日本画の絵具をまぶす人拓の技法で知られています。

戦後の中京地域の日本画を考える上で欠かせないのが、今年大規模な回顧展が開催された中村正義です。昭和27年（1952）に出身地の豊橋市で中日美術教室を開設した正義は、星野をはじめ、大森運夫、平川敏夫、高畑郁子といった同郷の画家たちと一緒に絵画指導を行いました。特に大森は正義と出会ったことで日本画を志し、後に国語教師の職を辞して、正義の神奈川県の実家に転居し画業に専念しました。《[少女]》は正義が画風を大きく変化させる前の愛知時代の貴重な作品です。《女》と見比べると、その画風の変遷を感じることができます。

片岡球子は昭和38年（1963）に、正義が発案し矢野純一、針生一郎が主宰した「新日本画研究会」に参加し、昭和41年には愛知県立芸術大学の開学と共に日本画専攻の主任教授に就任、中京地域の日本画振興に多大なる貢献を果たしました。新日本画研究会には前述の星野、下村、三上も参加しました。他にも、戦後の第1回日展に入選以降同展に入選を重ね、戦後の中京地域を象徴する日本画家として平成まで活躍した嶋谷自然や、愛知県立旭丘高校美術科出身で、現在も活躍する平松礼二といった画家たちも、中京地域の戦後日本画を考える上では欠かすことができません。

名古屋市美術館の現代美術コレクションを代表する作家の1人で、ミニマル・アートの先駆者として知られる桑山忠明は、高校時代に名古屋を代表する日本画家・朝見香城の画塾に通い、東京藝術大学日本画科の名古屋初合格者となりました。アクリル絵具を用いた単色の画面で知られる桑山ですが、渡米後しばらくは《無題》（昭和36年〔1961〕）のように日本画の絵具を使った作品を制作していました。また、前衛日本画集団「ゼロ次元」の活動で知られる岩田信市も、10～20代の一時期、日本画家・石川英鳳の蓬萊画塾で学びました。常設企画展「近代名古屋の日本画界」では、朝見香城、石川英鳳の作品も展示していますので、あわせてご鑑賞ください。

メキシコ・ルネサンス

藤田嗣治が見たメキシコ

開催中の特別展「藤田嗣治 絵画と写真」に関連して、1932～33年の藤田のメキシコ滞在と同時期の作品を中心に展示します。

1932年の11月にメキシコに到着した藤田は、翌年の6月まで同地に滞在しました。メキシコでは、当時タスコの野外美術学校の校長であった北川民次と交遊を深めました。藤田は北川に誘われてタスコにも1週間程度滞在しています。北川は1936年に帰国し、以降二科会を中心に活動をしませんが、その背景には藤田の協力があり、1937年に北川が個展を開催した際にも、藤田は推薦文を寄せています。

また、藤田はパリ留学時代のディエゴ・リベラとも交遊がありました。《スペイン風景》は藤田とリベラが交遊を深めていた時期の作であり、同年にリベラは藤田と、同じく交遊があった川島理一郎のキュビズム風の肖像画を描いています。藤田がメキシコを訪問した時期には、リベラはアメリカで壁画制作をしており、2人が再会を果たすことは叶わなかったものの、メキシコ文部省のリベラの壁画を藤田は実見しています。そして、同時期にリベラがアメリカで手掛けていた壁画の1つが《プロレタリアの団結》です。藤田は、1932年に竣工したばかりのリベラとフリーダ・カーロのアトリエ兼住居も訪問しています。1936年に北川民次がその建物を描いた絵が残っています（《赤い家とサボテン》[※]）。藤田は1933年の帰国後、《秋田の行事》（公益財団法人平野政吉記念財団蔵）に代表される大画面壁画の制作を数多く手掛けましたが、その背景としてメキシコ壁画運動からの影響が指摘されています。

特別展では、藤田の撮影した写真が多数展示されていますが、今回は藤田のメキシコ滞在と同時期に同地で活動していたドイツ人写真家、フーゴ・ブレーメの作品も取り上げます。フーゴ・ブレーメはメキシコの風景や建造物、遺跡などをピクトリアリズム調に撮影した写真家です。初期のマヌエル・アルバレス・ブラボの指導者で、大きな影響を与えた人物として知られています。ブレーメの作品は当時の観光ガイドや雑誌にも掲載され、国内外にメキシコのイメージを喧伝する役割を果たしました。藤田とブレーメでは出身国や写真への取り組み方に違いはありますが、ぜひ両者の写真を見比べて、異邦人が捉えたメキシコの姿に思いを馳せてみてください。

名古屋市美術館  Nagoya City Art Museum

名古屋市中区栄二丁目17番25号（芸術と科学の杜 白川公園内）

TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005

<http://art-museum.city.nagoya.jp/>